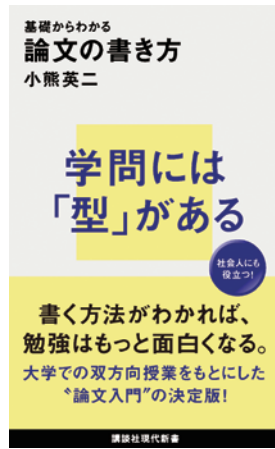


慶應義塾に関連した出版物や教職員の新刊著書などを中心に、本に関する情報をお届けします。

「論文とは何か」を知ることが
書くための第一歩

『基礎からわかる論文の書き方』

小熊英二（総合政策学部教授）著
講談社現代新書／1320円（2022年5月）



筆者が担当する「アカデミック・ライティング」の講義をベースに書かれた、あらゆる学問領域で活かせる「論文の書き方」を基礎から身に付ける入門書。「どう書くのか」より先に「論文とは何か」や研究の進め方の理解なしに論文は書けないというのが、筆者の前提となる。「人間は不完全だから進歩するし、努力する。そして、人間が一人でやれることには限界がある。だから書いて、公表し、他人と対話する。そのように、私は考えています。それが『論文の書き方』の、いちばんの基礎にあたるものです」（本書第11章より）。社会学者である筆者の個性がにじみ出る「読んで面白い入門書」である。

教職員執筆の新刊

●赤江雄一（文学部教授）、岩波敦子（理工学部教授）編著

『中世ヨーロッパの「伝統」―テキストの生成と運動』

慶應義塾大学出版会／3850円（2022年3月）

●山腰修三（法学部教授）編著

『対立と分断の中のメディア政治―日本・韓国・インドネシア・ドイツ』

慶應義塾大学出版会／3520円（2022年4月）

●柘植尚則（文学研究科教授）著

『人間は利己的か―イギリス・モリスの論争を読む』

慶應義塾大学出版会／770円（2022年4月）

●國領二郎（総合政策学部教授）著

『サイバー文明論―持ち寄り経済圏のガバナンス』

日経BP 日本経済新聞出版／2200円（2022年5月）

●川原繁人（言語文化研究所教授）著

『フリースタイル言語学』大和書房／1980円（2022年5月）

●前野隆司（システムデザイン・マネジメント研究科教授）著

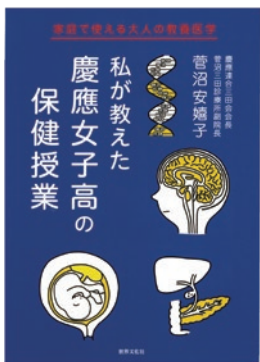
『ディストピア禍の新幸福論』プレジデント社／2420円（2022年5月）

慶應義塾この一冊

『私が教えた慶應女子高の保健授業』

―家庭で使える大人の教養医学―

菅沼安嬬子著
世界文化社／2970円
（2022年4月）



内科医である筆者は15年間、慶應義塾女子高等学校の保健体育の授業を担当した。「女子高生が大人になり結婚して子供を産み育て、親の介護に至るまで、自分と家族の健康を守るのに必要な知識を全部教えよう」（本書前書きより）と取り組んだ授業は人気授業となった。本書はその授業内容をまとめて2009年に出版された『大人も学ぼう心と体と病気の知識』の改題増補版。時代情勢や医療の進展を踏まえた加筆訂正を行い、完成度を高めた。心身の健康への関心が高まる今こそ、本書の真価が理解されるはずだ。